



杉山センター長と三澤教育長

協定の背景  
 本学伝統文化リサーチセンター研究事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」(平成十九年度文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業)では、國學院の学術資産を活かしつつ、伝統文化と、伝統文化の形成過程に関する研究を進めている。そのうち、「祭祀遺跡に見るモノと心」グループは、祭祀考古学的な立場からの研究活動を行っており、地

域環境・地域景観の中で形成された祭祀・儀礼の研究を一つの検討テーマに設定した。

祭祀考古学は、そもそも景観研究との親縁性が強く、顧みれば大場磐雄自身、静岡県下田市洗田遺跡から、近傍の三倉山山頂に夕陽が沈む姿を拝した経験をもとに、「神道考古学」の提唱に至ったのである。その後、小林達雄は、縄文遺跡における景観研究を推進し、「縄文ランドスケープ」論を構築した。その代表的な研究対象が環状列石であり、伝統文化リサーチセンターでも東北地方北部の事例について研究を進めている。具体的には、縄文時代後期(約四千年前)の環状列石に関する実地調査や分析を行なっているが、このような研究活動を実施する中で、既知の環状列石でありながら、詳細が充分明らかになっていない遺跡が認められた。その実態を解明する必要性が生じた。秋田県北秋田市の石倉岱遺跡は、その一例である。

一方、北秋田市では、「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一つとして、

環状列石で有名な伊勢堂岱遺跡の世界遺産登録を目指しており、その重要性を語るためにも関連する石倉岱遺跡の調査が望まれていた。

そこで、本学研究開発推進機構(機構長・阪本是丸)と北秋田市教育委員会(教育長・三澤仁)は、協同して縄文時代の祭祀遺跡研究に当たるため、平成二十二年七月一日に研究協定を締結することとした。

協定事業内容

この研究協定は、伝統文化リサーチセンターと、北秋田市教育委員会「世界遺産登録推進事業」の円滑な推進を目的として、主に石倉岱遺跡の調査研究を中心に縄文祭祀研究を執り行なうものである。研究協定締結式は、七月十五日に北秋田市中央公民館で行ない、閉式後には研究成果における普及を期して、杉山林継センター長による記念講演「日本列島における石信仰」を開催した。また、十一月には、早速石倉岱遺跡の

試掘調査を行なっている。

関連して、伝統文化リサーチセンター資料館の企画展「縄文人の世界観とカタチ」も、両者の共催事業として実施した(一月二十四日〜三月十九日)。この企画展では、伊勢堂岱遺跡や石倉岱遺跡の出土品等を展観し、遺跡形成の歴史的脈絡や、遺物から見える儀礼行為に関する分析成果を紹介した。なお、同展については、去る平成二十一年度から当機構と研究協定を締結している英国セインズベリー日本藝術研究所の協力と、(共)総合地球環境学研究所の文明環境史領域プログラム「東アジア内海の新石器化と現代化・景観の形成史」(リーダー・内山純蔵)による地理情報システム分析の情報提供などを受けている。

今後は、石倉岱遺跡の調査を推進しつつ、北秋田市と共同で成果の公開を進め、学術研究活動を通じた地域貢献を進めていく予定である。

**國學院大學**  
**研究開発推進機構**  
**機構ニュース**

Vol. 4 No. 2  
 発行人 是丸 浩二  
 編集人 菅 浩三  
 〒150-8440 東京都渋谷区東  
 4丁目10番28号  
 電話 (03) 5466-0162  
 FAX (03) 5466-9237

平成二十二年度に締結された北秋田市との研究協定について

目次

- ◆平成二十二年度に締結された北秋田市との研究協定について……………1
- ◆公開学術講演会「現代イスラームと日本社会」(京大大学教授/小杉 泰)……………2
- ◆国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」……………3
- ◆「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」シンポジウム……………4
- ◆「霊魂・慰霊・顕彰の民俗」……………4
- ◆学術資料館公開シンポジウム「縄文人の石神―大形石棒にみる祭祀行為―」……………5
- ◆第三十六回日本文化を知る講座……………6
- ◆「神話世界と日本古代の霊魂観―考古学・歴史学・神道学・神話学―」……………6
- ◆研究開発推進センター「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクト、「渋谷学」プロジェクト 活動報告……………8
- ◆平成二十二年度伝統文化リサーチセンター活動報告……………9
- ◆彙報……………10
- ◆資料紹介「石清水祭祀花神饗」……………12

## 公開学術講演会

## 「現代イスラームと日本社会」

小杉

泰 (京都大学教授)

平成二十二年(二〇一〇)十月二日(土)の十五時から十七時にかけて、國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホールにおいて、講師に小杉泰氏(京都大学教授)を招いて公開学術講演会「現代イスラームと日本社会」がおこなわれた。

研究開発推進機構の催事としておこなわれた同講演会は、翌日におこなわれた国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」(主催 研究開発推進機構日本文化研究所、共催 科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」と内容的に連動しており、その基調講演としての性格を持つものであった。なお、同研究フォーラムについては本号に紹介記事がある。

小杉氏はまずイスラーム圏で広く使われている「アッサラーム・アライクム」という挨拶について紹介した。これはアラビア語で「平和があなたたちの上にありますように」という意味であり、これに対して相手は「ワ・アライクムッサラーム」、すなわち「そして、あなたたちの上にも平和がありますように」と返すことになっており、これはお互いに出会う相手に対して敵意がないこと

を示すものであるという。

確かに現代社会においてイスラームのシステムが西洋近代のシステムにうまくあてはまらないように見える面があるが、そもそもイスラームが誕生したオリエント地域は「文明の十字路」という言い方があるように多様な文明が出会ってきた場であり、そうした場において多様な人々が共存するための知恵をイスラームが育んできた面があることが指摘された。

これに関連して、自身の研究の出发点となったエジプト留学の際に現地の人々から手厚くもてなされた体験を振り返りながら、小杉氏はイスラーム圏では遠くから来た人をもてなすホスピタリティーの原則が強く見られるとし、更にこうしたホスピタリティーの原則とつなげてイスラーム法に「客の権利」、つまり歓迎される権利がよそ者に与えられていることを紹介した。そして、これもまた異なる人々を共存させるための知恵の一つであるとして、単に科学技術やテクノロジーだけを追い求めるのではなくこうした人間生活の技術ともいべき知恵にも目を向ける必要があるのではないかと述べた。

これを受けて小杉氏は、こうした

観点からイスラーム文明を捉えるとまた違うものが見えてくるのではないかと問題提起をおこない、たとえばいわゆるグローバリゼーションにおいて弱肉強食的な価値観が強調されてしまっていることに対して、イスラームが「敗者復活」や「弱者救済」といったメッセージを発していることの意味をあらためて考え直してみても良いのではないかとした。

次に、イスラーム世界の概要について全世界の人口の五分の一を超えたあたりであると推定されていることや、あるいは五十七の国と地域がイスラーム諸国会議機構のメンバーとなっていることなどに触れながら、現実に世界の多様な地域においてムスリムが生活を営んでいることを述べた上で、逆に何がそうした多様性を貫いてイスラームとしてのまとまりを形作っているのかについて話した。

小杉氏は、まずイスラーム法とそれに定められた戒律に触れ、一般にイスラームの戒律についてはラマダーン(断食月)などを例として「厳しい」というイメージがあることに触れた上で、しかし日没後の食事が祝祭的性格を持つていることを説明して、必ずしも「厳しさ」ばかりではないと述べた。しかし、それが全世界のムスリムに等しく適用され、変更が許されていないという意味では確かに「厳しい」ものであり、またそれがイスラームの普遍性を担保しているとした。

続けてここ四十年間に見られてい

るイスラーム復興運動を取り上げ、現象としては(一)モスクの増加、(二)貧民救済などの福祉活動、(三)マツカ巡礼者の増加、(四)イスラーム銀行の成立、(五)イスラーム政治という順番で起こるものであり、かつ(四)と(五)については必ずしも全ての地域で見られるわけではないということを指摘した上で、しかしメディアに流れる情報としては逆の順番、とりわけ(五)の面のみを取り上げられがちであり、そこを注意して見る必要があると論じた。

最後にソフトパワーとしてのイスラームが一定の注目を集めており、かつ実際にムスリム人口が増加していることに触れ、今後日本においてもより大きな存在になっていく可能性があることについて述べた。そして日本において真の意味で隣人の宗教となるためにはやはり「日本語で語られるイスラーム」になっていく必要があるとし、このことをこれから真剣に考えていかななくてはならないのではないかと聴衆に問いかけて講演を終了した。

全体を通して、イスラームについての基礎的な知識から説き起こして現代の問題にも触れ、また日本社会との関わりについても、今後の課題を含めて論じられ、「現代イスラームと日本社会」というタイトルに相応しい講演となった。

(文責・星野靖二)

## 国際研究フォーラム 「イスラームと向かい合う日本社会」

平成二十二年(二〇一〇)十月三日(日)に、國學院大學学術メディアセンター一階の常磐松ホールにおいて、国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」が開催された。これは研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」との共催により開催された。



エジプト、オーストラリア、ドイツから三人の外国人研究者を招聘してのフォーラムであったが、非常に内容の濃いフォーラムで、きわめて充実した発表及び討議がなされた。

なお、この前日に開催された小杉泰氏(京都大学教授)による講演「現代イスラームと日本社会」は、研究開

発推進機構の公開学術講演会であったが、同時にこのフォーラムの基調講演としても位置づけられていた。

\* \* \*

会議は午前十時から午後五時半まで行われ、五つの発題に続いて総合討議がなされた。発題者とタイトルは次のとおりである。各セッションはそれぞれ五十分、総合討議は一時間半を費やして行われた。いずれの司会も井上順孝が務めた。

・開会挨拶および趣旨説明

井上順孝・國學院大學教授

・第一セッション

三木英・大阪国際大学教授「モスクが来た街」

・第二セッション

イサム・ハムザ・カイロ大学教授「イスラームは日本の宗教になり得るか」

・第三セッション

サリー・ユージェル・モナシユ大学教授(オーストラリア)「Is Islam Part of the Problem or Solution?」イスラームは問題なのか解決なのか」

・第四セッション

グリット・クリンカマー・ブレメン大学教授(ドイツ)「Germany: Problems and Developments of Religious and Cultural Integration」ドイツー宗教および文化統合の問題と最近の状況」

・第五セッション

中西俊裕・日本経済新聞社編集委員「イスラーム世界との絆」

・コメントと総合討議

コメンテーター 師岡カリーマ・エルサムニー氏

\* \* \*

まず各セッションの討議の概要を順に紹介する。最初の発題者三木英氏は、現在日本に五十九のモスクがあるとし、調査対象に選んだ大阪にある二つのモスク(大阪モスクと大阪茨木モスク)の事例を紹介しながら、ムスリムと地域住民との目立った摩擦はないとした。そのうえで、モスクに来る人と地域住民との交流は、モスク外にそうした場を設けたほうが円滑ではないかという見解を示した。

ハムザ氏は、イスラームの基本的考案と、明治以来の日本とイスラームとの関係について私見を述べ、「日本型のイスラーム」が形成されることが、イスラームが日本に受け入れられる条件になるのではないかとした。

ユージェル氏は、オーストラリアのムスリムの現状について簡単に説明したのち、オーストラリア移民の事例から日本社会が何を学びとれるかを考えてほしいと述べた。宗教ごとの違いよりも、互いの共通性に目を向ける時代になったのではないかと、という主張がなされた。

クリンカマー氏は、ドイツにおけるムスリムの置かれた状況、とくに移民の二世たちの状況について説明した。現在ドイツには四百万人程度のムスリムがおり、その半分くらいは市民権を得ているとした。二世たちがなかなかドイツ社会に溶け込まないということが指摘された。しかし、新しいネットワークも形成されており、こうしたものが将来の共存への助けになるのではないかとした。

中西氏は日経新聞国際部の編集委員で、バーレーンに赴任した経験などがあり、ときおりイスラーム関係のコラムを担当している。政治、経済面でのイスラーム国との関係の重要性に触れ、産・官・学の連携による関係構築の必要性に言及した。

\* \* \*

全体討議では、最初にエジプト人の父と日本人の母をもつ師岡氏からコメントがなされた。日本人のムスリムに対する態度と同時に、ムスリムが日本社会において、自分たちの理解者を増やしていくためには、どのような心構えが必要かという点についても、私見が述べられた。

日本でムスリムへの排除があまり見られないのは、遠い国から来た人として受け止めているのではないのか、異文化への強い好奇心があるのではないかとする一方、日本人がムスリムになった場合には、違う態度になるのではないかと、など体験に基づいた鋭い指摘がなされた。

フロアからもいくつか質問が出された。イスラームは進化論をどう扱うのか、「9・11」をどう理解した方がいいのか、というような根本的な問題を含め、いくつか興味深い質問がなされた。

フォーラムには百名近くが参加した。フォーラムの様子は、スカイパーフェクTVの精神文化映像社の番組(二一六チャンネル)として、平成二十三年(二〇一一)一月十二日、二十六日に、それぞれ一時間番組として放映された。

(文責・井上順孝)

## 「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」シンポジウム 「霊魂・慰霊・顕彰の民俗」



平成二十二年二月十三日、國學院大學研究開発推進センター研究事業「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」の一環として、シンポジウム「霊魂・慰霊・顕彰の民俗」が渋谷キャンパス・常磐松ホールで開催された。近代日本、とりわけ昭和期から現代にいたる時期に焦点を当てつつ、地域社会や遺族、戦友などがおこなってきた戦歿者祭祀・慰霊のありよう

について、家庭での慰霊や神道・仏教的な祭祀、供養儀礼、さらに海外慰霊巡拝など、具体的な事例に基づいて検討をしたうえで、人々の霊魂観念や、国家的・公的な慰霊・追悼・顕彰との相関について議論を深めることがその趣旨であった。

まず、川村邦光大阪大学教授「戦死者の霊、亡霊、そして弔いをめぐって」、白川哲夫京都府立大学講師「揺れ動く魂―慰霊施設に人々が求めたもの―」、中山郁子國學院大學研究開発推進機構講師「戦没英霊との出会い、そして慰霊―ニューギニア慰霊巡拝にみる霊魂観―」の発題、新谷尚紀国立歴史民俗博物館教授のコメントがおこなわれた後、阪本是丸國學院大學研究開発推進センター長を司会とする討議がおこなわれた。

### 一、発題

川村氏は、軍隊・戦争にかかわる死者が亡霊となって現れたとする事例に着目し、八甲田山雪中行軍遭難兵士、ガダルカナル島で全滅した一木支隊の兵士などの霊が現れた話など、「萬朝報」などの新聞記事や民話などに書かれた幾つかの事例を通して、その内容や伝承の特徴を報告した。白川氏は、滋賀縣護國神社を事例として、戊辰戦争で戦死した人々を祀る招魂碑が明治二年九月に建設されたことを基とする歴史的経緯な

どを説明した上で、戦後においては、慰霊・顕彰の場であるのみならず、平和への祈りを表現するモニュメントが構築された事例などもあり、平和を願う場として機能してきた一面もあることを指摘した。中山氏は、海外慰霊巡拝に着目し、大東亜戦争の最激戦地となった東部ニューギニア戦線における慰霊巡拝を事例として、現在も八万人の戦歿者の遺骨が残っていること、遺族等の活動を説明した上で、家や地域での慰霊・年忌法要、国・地域の公的な慰霊顕彰においては果たし得ない、戦歿地における遺骨収集・慰霊巡拝の現状について、フィールドワークの結果も含めて報告した。

### 二、コメント

続いて、「慰霊と追悼―民俗学の視点から―」と題して新谷氏がコメント。歴史学としての民俗学という立場から、まず戦争と民俗という問題を考える際の枠組みとして、「戦歿者」「戦争」「死」などの語彙が多様な意味を含むことから、それを分析する必要性があることを提言した。そして柳田国男『先祖の話』の論点などを説明した上で、家と先祖、人間の死などについて、人々がどのように考えてきたかの変遷過程を民間伝承の資料収集・整理と比較分析で解明できることを指摘した。

かなどを指摘。白川氏には、護國神社境内の各種モニュメント建設と歴史的背景との関わりについて、各地の護國神社との比較研究についての展望などを確認した。中山氏に対しては、慰霊巡拝の時間経過による変化、中国における慰霊巡拝の実際などについて、質問とコメントをおこなった。

### 三、討議

討議においては、コメントに対して川村氏が幾つかの地域の事例を紹介し、亡霊についての語りによって弔いをするという人々の意識があるのではないかと述べた。白川氏は、各種モニュメント建設と時代背景の関係性を改めて確認し、大阪・京都などの例を掲げつつ各地域の護國神社の比較研究を進めていく必要性を述べた。中山氏は、慰霊巡拝の時間的な変化として、戦友の減少、遺族の世代と意識の変化があり、慰霊碑の維持をする人々の減少があること、中国の慰霊巡拝については政治的な問題もあり、活発ではない現状などを述べた。

阪本氏は、招魂社成立当初よりの「慰霊」の伝統、祭神を合祀するかどうかを真剣に議論して合祀した江華島事件の事例など、祭神の個性性にも着目しながら、当時の「霊魂観」「死」の捉え方を考えることの重要性を指摘。最後に、今後も実証的な調査と具体的な検証を積み重ねて、日本人の霊魂観をさらに考察し議論していく必要性を述べた。

## 学術資料館公開シンポジウム 「縄文人の石神——大形石棒にみる祭儀行為——」

久々に光があたった太古の「石神」  
昨年十月九日、学術資料館の公開シンポジウムとして表題の研究集会を開催した。

「縄文人の石神」というのは、縄文中期に俄然発達した大形石棒のことをさす。縄文人の宗教的観念を表現する遺物は種々あるが、大形石棒はその巨大さでひと際目をひく特別な存在である。縄文人の世界像や神観念に係る重要な象徴にまちはないのだが、その正体は謎のままであり、研究もあまり進んでいない。

大形石棒が今回のようなシンポジウムの主題となることはほとんどなかった。考古学にとつて、過去の精神文化やイデオロギーの研究ほど困難な課題はなく、実証が難しいからである。平成六(一九九四)年に岐阜県宮川村で開催された「宮川シンポ」以来、久々に光があたった観がある。

今回のテーマに掲げたのは、石棒に関わる「行為」の復元である。縄文人が石棒をどのように取り扱った

のか、どのような状況の中に残されているか、そうした証拠を丹念に集め、どこまでのことが実証的に言えるのかを整理する。それがねらいである。

### シンポジウムの内容

学術資料館では、「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開」プロジェクトの一つとして、平成十九年度から三カ年計画で、石棒プロジェクトを推進してきた。本学所蔵品を整理実測するとともに、東日本地域の主な大形石棒を集成し、研究の基礎となるデータを整理した。

集成された石棒は、八三七遺跡、三〇四九本に上った。この悉皆的な資料集作業を通じて、さまざまな事実を把握することができた。今回のシンポジウムは、石棒プロジェクトのそうした成果を公開するとともに、大形石棒の研究者を招き、石棒祭儀の復元をテーマに討論を行ったものである。研究発表の内容は次のとおり。

### ◎総論(研究目的と課題整理)

谷口康浩「縄文人の石神——大形石棒の象徴的意味を探る——」

### ◎基調報告(集成資料・分析報告)

石井匠「大形石棒の造形デザイン」  
成田美葵子「大形石棒の出土状況」  
中島将太「大形石棒に加えられた行為」

### ◎研究報告(各論研究)

大工原豊「大形石棒の製作遺跡と流通——北関東における火成岩製石棒の製作と流通を中心として——」、鈴木素行「大形石棒が埋まるまで——事例研究による「石棒」(鈴木二〇〇七)の補遺と修正——」、長田友也「石棒観察から読み取れること」、山本暉久「住居跡での石棒の出土状況——くに廃屋儀礼との関わりにおいて——」、中村耕作「大形石棒と縄文土器——異質な二者を対置する行為——」、阿部昭典「東北北部の大形石棒にみる地域間交流」、中村豊「東部瀬戸内地域における大型石棒の出土例——晚期後半を中心に——」

### 成果と課題

石棒にはさまざまな行為の痕跡が残り、敲打・磨き・穿孔・分割・燃焼などが具体的に確認できる。そこから行為の種類や特徴的なパターンを抽出できる。また、石棒の出土状況にもパターンがあり、住居跡や配石遺構といった出土場所のほか、土器や石皿などの配置に一定の傾向が見られる。そこから復元される「行為」をつなぎ合わせ、製作から廃棄に至る石棒のライフサイクルを整理することによって、石棒の正体に迫る手がかりが得られるはずである。今回の発表と討論を通じて、その点の共通理解は得られた。

もちろん、すべての行為が「祭儀行為」なのかどうかは即断できない。そうした解釈を抑制して、当面は現象面の解析を進めるべきとの指摘もなされた。また、関東・中部地方と東北地方とは、石棒の型式のみならず、行為をめぐるコンテクストがかなり相違している事実も浮き彫り

となった。石棒として一括りにできない性質のものが含まれることも予測され、慎重に弁別していく必要がある。

祭儀行為の復元までにはなお課題も多いが、これからの研究の筋道について一定の見通しが立てられたことは、着実な成果であったと思う。研究成果の公開について

三カ年計画で推進してきた石棒プロジェクトも本年度でひとまず終了する。考古学部門所蔵品の実測・公開、および東日本地域の大型石棒の集成資料、関連文献リストを、近日中に報告書にまとめ、研究成果を公開する。また、シンポジウムの研究発表と総合討論を基礎として、パネリストに改めて原稿執筆を依頼し、研究論集として出版する予定である。

縄文への関心がいま世界的に高まっているが、縄文文化の真髄に少しでも近づくためには、縄文人の固有の世界像や観念形態を研究対象に指定しなければならぬ。衣食住のような日常の暮らしぶりだけでなく、縄文人の「心」について考究しなければ、縄文文化の核心には到底接近できないであろう。シンポジウムは百名を超える一般参加があり、多くの人々にそうした共感が広がっていくことを期待している。

石棒プロジェクトはまもなく終了するが、石棒や土偶に関するデータ収集を今後も継続し、「縄文的心」の情報発信センターとしての役割をこれからも拡充していければと考えている。情報の提供・教示を各方面にぜひお願いしたい。

(文責・谷口康浩)



第三十六回 日本文化を知る講座  
「神話世界と日本古代の靈魂観」  
— 考古学・歴史学・神道学・神話学 —

講座の概要

当機構と渋谷区教育委員会の共催で実施する「日本文化を知る講座」は、旧日本文化研究所時代から数えて今回で三十六回目となった。言うまでもなく、当講座の目的の一つは、本学ならではの研究を、広く社会へ還元する所にある。そこで今回は、漠として捉え難い古代の神観や靈魂観について、多様な学問的立場から検討することとし、主題を「神話世界と日本古代の靈魂観—考古学・歴史学・神道学・神話学—」と定めた。担当は、

学術資料館助教の深澤太郎(第1回…六月一二日)、神道文化学部教授の笹生衛(第2回…同一九日)、神道文化学部教授の岡田莊司(第3回…同二六日)、日本文化研究所准教授の平藤喜久子(第4回…七月三日)である。各回の具体的内容については、以下の概要を参照されたい(文責・発表者)。

①古墳祭祀にみる原「神道」の姿

深澤太郎(本学助教)  
神道の起源を辿るには、古代神祇祭祀の構造を遡及する方法が有効であり、笹生衛氏は中期古墳の副葬品セツ

トに定型的な幣帛の淵源を認めた。勿論、この時期に幣帛・神宝・装束や神饌の原型が整備されたにせよ、その形成過程には、なお検討の余地がある。そこで今回は、前期・中期古墳の副葬品や、埴輪等に模倣された財を整理し、原「神道」の姿を眺めていく。古墳と祭祀遺跡の出土遺物は共通しており、むしろ祭具を撤下しない古墳の方が、その原状を把握し易いのだ。

前期古墳の副葬品は、弥生時代以来の装身具・鉄製武器に、農具、鏡等が加わる。これらは棺内だけでなく、棺外に配置されることもあった。副室と呼ばれる施設に、大量の武器等を埋納する例もある。中期の大型古墳に付随する陪塚には、財の埋納専用古墳も現れた。これらは、「幣帛・神宝」を納める「神庫」に相当する。

また、吉備地方の器台形土器に起源をもつ埴輪は、飲食物の表象にはかならない。実用土器類が古墳から出土することもあるが、中期には「神饌」まで土製品化する例もある。なお、盾・蓋・軋等の「装束・幣帛」も、次第に埴輪で表現されるようになった。

これらの祭具を伴う「古墳」は、弥生時代末の都市的空間「纏向」において、各地の弥生墳墓が持っていた諸特徴を習合したものである。原「神道」誕生の背景には、神々習合現象や、列島規模の社会統合があったのだ。当時の靈魂観を紐解くのは容易でないが、古典に見える神への幣帛と、古墳の副葬品が共通しているように、神・人の「魂」が均しい奉仕を受けてい

たことは容易に想像されるところである。

②考古学からみた祖先のまつり

— 祖(おや)の信仰とその系譜 —

笹生衛(本学教授)

お彼岸やお盆の行事など、祖先への信仰は現代日本人の中にも深く根ざしており、日本文化の基底に流れ、人と人を繋げてきた信仰でもある。その起源を、古代の『記紀』神話や『風土記』の伝承、さらに考古資料の検討から考えてみたい。

『記紀』には、祖先を示す言葉として「祖」の文字が使用されており、「おや」と読まれている。『日本書紀』では、一族の起源に当たる祖先には、特に「遠祖」「上祖」「初祖」「始祖」などの文字が使われ「とおつおや」と読まれている。また、『常陸国風土記』では、祖先の神「神祖命(みおやのみこと)」として子孫の所を訪ね、御馳走でもてなされる(饗応される)存在としても描かれている。

これら「祖」の用例の中では、「上祖」は埼玉県の稲荷山古墳出土の鉄剣銘に使われており、その年代は五世紀後半に遡る。また古墳に葬られた人物は「祖」とされていたと考えられ、稲荷山古墳では、祭祀遺跡の供え物と共通する副葬品が添えられ、飲食で饗応した痕跡も発見されている。つまり、「祖」とは、貴重な品々(副葬品・幣帛)と御馳走(神饌)を供え、神と同じ方法で祭る存在と考えられていたのである。

このような考え方は、五世紀には形成され、その後、八・九世紀の奈良・

平成二十二年 國學院大學公開講座  
第三十六回 日本文化を知る講座

# 神話世界と古代の靈魂観

— 考古学・歴史学・神道学・神話学 —

【主催】國學院大學研究開発推進機構  
【共催】渋谷区教育委員会

●日時 6月12日・19日・26日  
7月3日の各土曜日  
13:30~15:30

●場所 國學院大學  
学術メディアセンター  
1階 常磐松ホール

第1回 6月12日  
古墳祭祀にみる原「神道」の姿  
講師 深澤太郎(國學院大學助教)

第2回 6月19日  
考古学からみた祖先のまつり  
講師 笹生衛(國學院大學教授)

第3回 6月26日  
神の崇りと天皇  
講師 岡田莊司(國學院大學教授)

第4回 7月3日  
日本神話にみる靈魂観—神話学から—  
講師 平藤喜久子(國學院大學准教授)

対象 一般  
定員 150名(先着順)  
費用 無料

申込 6月10日(必着)までに電話、ハガキ、FAX、  
または電子メールで①郵便番号・②住所・③氏名(フリガナ)・④電話番号・「日本文化を知る講座希望」の旨、下記までお申込み下さい。

〒150-8440 渋谷区東4-10-28  
國學院大學 研究開発推進機構事務局  
TEL:03-5466-0162  
FAX:03-5466-9237  
URL:kikou@kokugakuin.ac.jp

交通機関 JR渋谷駅東口より、都バスU3系統  
「日赤医療センター前行」にて「國學院大學前」下車

平安時代まで受け継がれたと考えられる。それは、千葉県千葉市おゆみ野地区の集落遺跡と古墳群の変遷から裏付けられる。ここでは、五世紀後半に集落と古墳群が成立、その位置関係は九世紀まで踏襲されており、生者と死者・祖先との位置関係は、約四百年以上維持され、祖先に対する考え方も維持されたと推定できる。また、この古墳群では祖先を饗応したと思われる土器類が継続的に出土している。

祖先を飲食で御馳走するという信仰は、現在の盆行事にも残されており、仏教信仰の影響を受けても変わらない、日本文化の特徴と言えよう。

### ③ 神の崇りと天皇

岡田荘司 (本学教授)

古代の神は、崇りが神の重要な属性であった。神は地域を守護する神であるとともに、崇り神としての性格との両面をもっていた。現代人から見ると、神は守護神としての性格が一貫しているものとの理解が多いが、それは誤りである。古代の神々は、伊勢大神も出雲大神も八幡大神も、地域神も、崇ること存在感を増し、神の地位・社格を上昇させ、記録に遺された。神の崇りに対して、中央も地方も地域も、その対応には敏感であり、神が天皇へ直接崇ることもしばしばであった。

この事態を乗り越えるため、御体御トと呼ぶ毎年恒例の六月と十二月の二回、十日間におよぶ祭儀が行われた。一日から九日まで、向こう半年間の天皇の「御体(おのみま)」の安

否が卜われ、慎むべきことが天皇に十日奏上される。ここに神々と天皇・国司・神職との間で「循環型祭祀体系」が確立する。

古代における祭祀発展の形態を、崇り神から守護神へ、二区分に分離して発展したとする「進化」論的な説明は、明らかに誤解を生じる。古代の神は恐ろしい神であり、同時に尊い神でもあった。

神の崇り論を基点に、和魂・荒魂など神霊の行方を探り、近世に論じられる「善神・悪神一元論」、また「善神・悪神二元論」の論争にも言及する。

### ④ 日本神話にみる靈魂観

平藤喜久子 (本学准教授)  
— 神話学から —

神話の中には倭建命の物語で知られるように、死者の魂を運んだと考えられるような鳥や、ヤタガラスのように神の使いである鳥が登場する。今回は、神話にあらわれる「鳥の遊び」という言葉から鳥と靈魂の関係を考察した。

大國主神の子事代主神は、国譲りの使者がやってきたときに「御大の御前」(美保)で「鳥の遊び」を行っていた。「鳥の遊び」とはといったようなことだろうか。その手掛かりは「御大の御前」という場所にある。そこは、古事記で少名毘古那神が「鵜」すなわちミソサザイの姿をして海に向こうからやってきた場所である。少名毘古那神については、日本書紀の記述などから穀物神、穀霊ではないかと指摘されてきた。つまり事代主神が「鳥の遊び」を行っていたところは、

鳥の姿をした穀霊が訪れた場所なのである。

鳥と穀霊の関係を考える上では、弥生時代の土器などに鳥装の祭司が描かれていることも参考になるだろう。この鳥装の祭司は、春成秀爾によれば稲をもたらず鳥を招くものだという。こうしたことを考え合わせると、事代主神の「鳥の遊び」とは穀霊を招く儀礼であったと解釈できよう。さらにいえば、そこで招いていた穀霊とは、稲穂がにぎにぎしく実るといふ意味の名をもつ天孫邇邇芸命だったのでないだろうか。

空を自由に行き来する鳥の姿に古代の人々は去来する魂を重ね合わせた。日本神話にも鳥が運んだ様々な靈魂の姿をみることが出来る。

アンケート結果と今後の見通し  
以上の講座は、渋谷区、当機構事務課及び教員の協力体制により実施され、いずれも当初定員の100名を大幅に上回る300名、400名もの聴講を得た。予想外の受講希望に応じて、会場も予定していた常磐松ホールから、120周年記念二号館二〇四教室へ移動している。なお、最終日の参加者三二五名のうち二二二名より、講座関係のアンケートにご回答頂いた。最後に、その結果を紹介して今後の参考に供したい。

講座に参加する切っ掛けは、渋谷区製作の区ニュース・ポスター・チラシが約二六%、ダイレクトメールが約二三%、区・大学ウェブページが約一六%となっている。受講者は、区内在住者・区内在勤者が約一八%、

区外在住者が約四〇%、本学の他講座受講者が約二八%であった。このように、渋谷区内の方々からコンスタントな支持を得ていると同時に、ウェブページへ積極的なアクセスを頂戴している実態が見えてきた。また、ダイレクトメールなどを介してのリピーターや、他講座受講者の参加があった一方、今回は初めて受講された方が約六六%を占めた点に特徴がある。但し、参加者の約八三%が五〇代、七〇代以上の方々であった。前期試験の期間外に開催したが、学生を含む若年層へのアピール不足が否めない。

聴講した結果は、約九〇%の参加者が大方満足されており、各回のテーマが相互に関連する講座構成や、配布資料の充実などに好評を得た。一方、専門用語の説明不足や、説明進捗の速さなど、改善点も多々指摘されている。さらに、講師陣の討議や、資料館展示と連動したテーマ設定があっても良いのでは、といった意見も寄せられた。具体的な開講希望テーマとしては、日本神話、国家形成期の考古学・古代史学、祭礼行事、古典文学の研究、比較文化論などが目立っている。

このように、講座内容の充実や、講座を介した研究成果の普及については、社会のニーズに応えつつ、なお一層の努力を継続する必要がある。また、新たな聴講希望者の掘り起こしを図るためには、魅力的なテーマの設定と、様々な機会やメディアを通じた周知が求められる。

(文責・深澤太郎「各発表内容を除く」)

## 研究開発推進センター 「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクト、 「渋谷学」プロジェクト 活動報告

### ・「共存学」プロジェクト

本プロジェクトは建学の精神にみる学術理念を出発点とし、人間生活と自然、地域と国家など多様性の「共存」を主題に、持続的発展社会モデル析出に向けた総合的学問領域の開拓をめざして、平成二十一年度後期より始動した学際的取り組みである。

取り組みを本格化させた二十二年度は、八回に及ぶ打ち合わせ会議を通じて、日本を起点とする(一)ローカル(国内地域社会)(二)リージョナル(北東アジア社会)(三)グローバル(地球社会)のパススペクティブに即した事例研究から更にモデル構築へ、との方向性を確認し、またその具体化の方法を協議検討した。その上で外部講師を招いての公開研究会、問題と成果の共有を図る内部研究会の開催、現地調査実施、国際研究会への参加、などの事業を展開した。内部の会議・研究会以外の活動については、次の通りである。

### ○公開研究会

・第一回(六月四日)「地域おこし(振興)と農業ビジネス」…平野真(高知工科大学大学院教授)

・第二回(十月一日)「共存の哲学における複数宗教経験(inter-religious experience)―人間間、人間と自然、未知との共存をめぐる」…濱田陽(帝京大学准教授)

### ・第三回(十二月十七日)「水環境問題 ―水ビジネスへの提言―」

野中規正(国土交通省国土技術政策総合研究所交流研究員)

### ○国際研究会議参加

・第七回日韓次世代フォーラム「これまでの一〇〇年、これからの一〇〇年」(韓国・全南大学校他、六月二十六～二十七日)参加

・第十七回国際社会学会世界大会(スウェーデン・ヨーテボリ、七月九～十九日)参加、企画セッション

「気候変動政策に関する国際比較共同研究」発表

・生物多様性条約会議(COP10)(愛知県名古屋市、十月二十五～二十九日)参加

○海外調査

・中国東北地区における調査(経済格差・少数民族問題、宗教施設復建など、九月十二～二十六日)

### ○公開フォーラム

・フォーラム「共存学」二〇一一「生命(いのち)と文化の多様性―森・里・海の絆を結ぶ―」二十三年一月二十二日

新領域創出の試みである本事業の対象とアプローチの方法は、右の通り非常に多岐に亘る。今後も全体のディシプリンと個々の取り組みの位置づけを確認・検討し、主題の分散を避けつつ問題意識を深化させると共に、成果を積極的に発信し、同様の課題に取り組む内外の研究者との連携を模索することが重要であろう。

「渋谷学」プロジェクトでは、(渋谷)という地域に根ざした共同研究を歴史・地理・民俗・神道・宗教・経済・行政・地理など多角的な観点から遂行している。今年度は現在まで、次のような活動を行ってきた。

まずプロジェクトの中枢をなす渋谷学研究会は二月までに全四回開催された。第一・三・四回はいずれも二名ずつの報告者による研究報告と討議が行われた。具体的内容は、第一回 平野明夫「中世渋谷の領主」・吉岡孝「江戸時代渋谷における藩邸とその周辺」、第三回 内山京子「武家地の転用と渋谷」・手塚雄太「渋谷区」の誕生、第四回 黒崎浩行「渋谷のコミュニティと神社祭祀」・伊藤暢直「池袋と池袋駅」である。また、第二回では「渋谷の花街を歩く」と題して、林和生・佐藤豊(渋谷区在住カメラマン)の案内のもと、道玄坂(百軒店)・円山町・神泉町方面の街歩きを実施し、大学院生や一般の方々の参加も得た。当日の様子は「東京新聞」でも報じられた。

後期には、学部の教養総合講座とオープン・カレッジを兼ねた講座「渋谷を科学する」を開講した。オムニバス形式の講義で、各回担当の講師によってさまざまな角度から(渋谷)の姿が明らかにされた。受講者は学生と一般の方をあわせて約二百名にのぼった。各回の担当者と内容は以下

の通りである。林和生「川が造った魅力あふれる街―渋谷―丘(台地)と河谷と坂の街」、粕谷崇(渋谷区教育委員会)「渋谷を掘る―原始古代の渋谷」、平野明夫「室町・戦国時代の渋谷」、吉岡孝「江戸時代の渋谷―羽沢山房をめぐる空間と周辺の名所」、上山和雄「渋谷と首都圏の形成」、藤田大誠「(表参道)の誕生―明治神宮創建の歴史をひもとく」、倉石忠彦「渋谷の人びと」、長野隆之「渋谷世相史」、石井研士「渋谷の神々」、黒崎浩行「渋谷のコミュニティと神社祭祀」、橋元秀一「渋谷エコノミー―統計データからみた渋谷区およびシブヤの地域経済的特徴と課題」、田原裕子「代官山らしさの形成と最近のまちづくり」、依田育也(東京急行電鉄)「タミナル渋谷の歴史と形成」、佐藤豊「渋谷の記憶」。

一方、刊行物としては、「渋谷」の歴史について考古学、歴史学、地理学の視点からとらえた論集『渋谷学叢書2』、また昨年三月に開催された、各地の地域学を比較・検討したシンポジウムの内容を取めたブックレット『渋谷学ブックレット2』地元を「科学する」ということ」が、それぞれ二月末に刊行される予定である。

また、二月十九日(土)に渋谷学シンポジウム「渋谷を描く」を開催した。三月には渋谷にゆかりの深い平岩弓枝氏講演会を予定している。関係各位の温かいご支援を切に願う次第である。

(文責・遠藤潤)



## 平成二十二年度伝統文化リサーチセンター活動報告

平成十九(二〇〇七)年度に選定された私立大学学術研究高度化推進事業、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心」に学ぶ伝統の知恵と実践」については、当機構の伝統文化リサーチセンターが具体的なプロジェクトを実施している。その中では、「國學院の学術資産に見るモノと心」グループが対象とする学術資産を基盤に、「祭祀遺跡に見るモノと心」グループが伝統文化の形成過程を追求し、「神社祭祀に見るモノと心」グループが伝統文化の研究を行ってきた。この事業も、ついに今年度で四年目を迎えることとなり、五ヶ年計画の成果を取りまとめる段階に突入している。

そこで、平成二十二(二〇一〇)年度は大規模な特別展が予定されていないこともあり、伝統文化リサーチセンター資料館における企画展の充実を一つの柱として、成果公開を促進することとした。概ね二ヶ月に一回のペースで開催した企画展については、横断研究会の場で前提となる研究成果の位置付けや、展示コンセプト、展示資料に関する議論を行っている。また、展示と関連する研究フォーラムや、一部の研究会を一般公開形式で実施し、「調査・研究・公開」の一体的な展開を目指した。

一方、大学院や北海道短期大学部との連携も進めており、大学院共同演習や公開講座という形で、研究成

果を教学に反映させる取り組みを実践している。また、今年度締結した北秋田市との研究協定については、一面をご覧いただきたい。

なお、本来であれば各グループの研究成果や、定例研究会・出張調査などについても詳述すべきだが、紙幅の関係もあり、ここでは全体に関わる事業の紹介に止めた。詳細は、伝統文化リサーチセンターのニューズレター「伝統文化のモノと心」や、「伝統文化リサーチセンター研究紀要」を参照されたい。

## ●企画展

「日本の護符文化」(三月十七日～四月二十七日)

「伊豆半島・諸島における神社の成立と展開―祭祀考古学研究と校史資料活用―の現場から」・映像展示「伊豆の祭祀行事と祭祀遺跡」(五月十六日～七月十日)

「かぐや姫の物語―國學院大學学びへの誘い―」(七月十四日～二十一日)

「おほらいの文化史―祓給ふ祓申す―」(七月二十六日～九月二十五日)

「出雲国風土記とまつりの世界」(十月二日～十一月二十七日)

「やしりとまつり―社殿は何を伝えるか―」(十二月一日～一月十四日)

「縄文人の世界観とカタチ」(一月二十四日～三月十九日)

## ●研究フォーラム

「出雲の祭祀を考える―空間と構造―」(十月二十三日) 発表・加藤

里美「美保神社境内遺跡のまつりの道具」・柳浦俊一「まつりの道具の製作」・新原佑典「集落内の土器集積と祭祀」・西尾克己「出雲の古墳と祭祀遺跡」・コメント・松本岩雄(島根県教育委員会文化課長)・錦田剛志(島根県神社庁主事)、司会・深澤太郎

「やしりとまつり―社殿は何を伝えるか―」(十二月十一日) 基調講演・三浦正幸(広島大学大学院教授)「神社建築の歴史―建築学における神社―」、研究講演・池谷浩一「社殿の分布と文化財指定―文化財の視点から―」・山田岳晴「厳島神社と玉殿―建築学の視点から―」・新木直安「鴨社の祭における祭祀と社殿―宗教学の視点から―」、コメント・三浦正幸・西岡和彦

## ●横断研究会

「おほらいの文化史―祓給ふ祓申す―」(六月二十三日) 発表・加瀬直弥「おほらいを構成する二つの要素」・大東敬明「中臣祓の儀礼と註釈」・遠藤潤「近世おほらいの現場」

「伊豆の祭祀遺跡と神・仏」(一般公開トークイベント、六月二十三日) 発表・深澤太郎「展示とセッションの趣旨」・中村耕作「大場資料と國學院の考古学」・笹生衛「神まつりの「道具」と「場」」・内川隆志「黒潮圏のまつり」・三橋健(大学院客員教授)「三嶋大明神縁起」の世界

「出雲国風土記とまつりの世界」(八月二十四日) 発表・加藤里美「山とまつりの集団」・渡邊卓「出雲国風土記」桶縫郡神名樋山について

新原佑典「出雲国風土記の社と遺跡」

「やしりとまつり」(十月十四日)

発表・池谷浩一「文化財における神社本殿の特色について」・山田岳晴「厳島神社の社殿と祭祀」・新木直安「鴨社における祭祀と社殿」・齋藤しおり「國學院の絵葉書資料―神社絵葉書を中心に―」

「縄文人の世界観とカタチ」(十二月一日) 発表・加藤元康「企画展「縄文人の世界観とカタチ」の概要」・阿部昭典「環状列石と第二の道具の研究視点」・加藤元康「石倉岱遺跡の調査概要」・朝倉一貫「石倉岱遺跡の成果公開方法について」

●公開講座  
第四回「國學院の古典研究」(十一月二十一日) 講演・渡邊卓「折口説と文献学の狭間―記紀比較を通じた視点―」・月岡道晴「平城遷都1300年に読む萬葉集」・松本久史「延喜式」祝詞にみる古代人の言葉と信仰」・杉山林継「沼名川の底なる玉」、総括・秋元信英・司会・大東敬明

●講演会  
「日本列島における石信仰」(七月十五日、北秋田市中央公民館) 講師・梶山林継

●大学院共同演習  
大学院科目「上代文学研究Ⅰ」(上代文学特殊研究Ⅰ)(担当・辰巳正明教授)「出雲国風土記とまつりの世界」解説(十一月十八日) 解説・渡邊卓

大学院科目「神社行政・管理研究」(担当・阪本是丸教授)「近代の神社行政と皇典講究所・國學院」解説(十二月十七日) 解説・戸浪裕之

# 彙報

※伝統文化リサーチセンターの活動については『伝統文化のモノと心』(ニューズレター)をご参照ください。

## 会議

### ○全体

- ・平成二十二年度第二回企画委員会、七月二十一日(水)十一時～十三時、A M C棟五階会議室○六
- ・第三回企画委員会、九月八日(水)十一時～十三時、A M C棟五階会議室○六
- ・第四回企画委員会、十一月二十四日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・第五回企画委員会、平成二十三年一月二十六日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十二年度第二回運営委員会、九月二十三日(木)、若木タワー四階会議室○五
- ・第三回運営委員会、十一月二十五日(木)、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十二年度第一回人事委員会、平成二十二年四月二十八日(水)、A M C棟五階会議室○六
- ・第二回人事委員会、平成二十二年十一月二十四日(水)、A M C棟五階会議室○六
- ・資格審査委員会、平成二十二年十一月二十五日(木)

- 日本文化研究所
  - ・平成二十二年度第二回日本文化研究所所員会議、七月十四日(水)、A M C棟五階会議室○六
  - ・第三回日本文化研究所所員会議、九月一日(水)、A M C棟五階会議室○六
  - ・第四回日本文化研究所所員会議、十一月十八日(木)、A M C棟五階会議室○六

### ○学術資料館

- ・平成二十二年度第三回学術資料館会議、七月二十八日(水)、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・第四回学術資料館会議、八月二十五日(水)、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・第五回学術資料館会議、一月十九日(水)、A M C棟五階会議室○六

### ○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十二年度第二回校史・学術資産研究センター会議、七月二十八日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・第三回校史・学術資産研究センター会議、十二月十五日(水)十二時～十三時、A M C棟五階会議室○六

### ○研究開発推進センター

- ・平成二十二年度第一回研究開発推進センター会議、五月二十六日(水)十四時～十五時、A M C棟五階会議室○六
- ・第二回研究開発推進センター会議、八月五日(木)十三時～十四時、A M C棟五階会議室○六
- ・第三回研究開発推進センター会議、十二月十五日(水)十一時～十二時、

## A M C棟五階会議室○六

### 公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

#### ○全体

- ・第三十六回 日本文化を知る講座「神話世界と古代の靈魂観—考古学・歴史学・神道学・神話学—」、各回、十三時三十分～十五時三十分、渋谷キャンパス二一〇四教室
- ◇第一回 六月十二日(土)「古墳祭祀にみる原「神道」の姿」、講師〃深澤太郎(國學院大學助教)
- ◇第二回 六月十九日(土)「考古学からみた祖先のまつり」、講師〃笹生衛(國學院大學教授)
- ◇第三回 六月二十六日(土)「神の祟りと天皇」、講師〃岡田莊司(國學院大學教授)
- ◇第四回 七月三日(土)「日本神話にみる靈魂観—神話学から—」、講師〃平藤喜久子(國學院大學准教授)

#### ○日本文化研究所

- ・国際研究フォーラム「イスラームと向かい合う日本社会」、発題者〃三木英(大阪国際大学教授)、中西俊裕(日本経済新聞社)、Ism Hanza (エジプト、カイロ大学)、Sahh Yucel (オーストリア、モナツシュ大学)、Grit Kinkhamer (ドイツ、ブレーメン大学) コメントーター〃師岡カリマ・エルサムニ(慶應義塾大学、獨協大学、アナウンスラー)、司会〃井上順孝

- 平成二十二年十月三日(日)、A M C棟一階常磐松ホール、共催〃科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

- るシステム構築」
- ・公開講演会「観光と宗教」
- 講師〃井門隆夫(ツーリズム・マーケティング研究所主任研究員、関西国際大学客員教授)、司会〃井上順孝
- 平成二十二年十二月十一日(土)、A M C棟一階常磐松ホール、共催〃科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

### ○学術資料館

- ・学術資料館プロジェクト「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開」シンポジウム「縄文人の石神—大形石棒にみる祭儀行為—」、総論〃谷口康浩、基調報告〃石井匠、成田美葵子(國學院大學大学院博士課程前期)、中島将太(東京都杉並区教育委員会)、研究発表〃大工原豊(群馬県安中市教育委員会)、鈴木素行(財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社)、長田友也(南山大学非常勤講師)、山本暉久(昭和女子大学大学院教授)、中村耕作、阿部昭典、※紙上発表〃中村豊(徳島大学准教授)、討論司会〃谷口康浩、総合同司会〃深澤太郎

- 平成二十二年十月九日(土)、國學院大學渋谷キャンパス百二十周年記念一号館一一〇一教室、共催〃伝統文化リサーチセンター

### ○研究開発推進センター

- ・公開講演会「雅楽と神道文化」(共催)、講師〃塚原康子(東京藝術大学教授)、ヘルマン・ゴチエフスキ(東京大学大学院総合文化科学研究科准教授)、阪本是丸
- 平成二十二年六月二十六日(土)

十三時〜十七時、百二十周年記念二  
号館一階二〇一教室、主催〓財団  
法人神道文化会

・明治神宮鎮座九十年記念 公開学  
術シンポジウム「明治神宮造営をめ  
ぐる人々―近代神社における環境形  
成の転換点―」(共催)、発題者〓青  
井哲人(明治大学准教授)、畔上直  
樹(上越教育大学大学院准教授)、  
藤田大誠、コメンテーター〓山口輝  
臣(九州大学大学院・准教授)、司  
会〓今泉宜子(明治神宮国際神道文  
化研究所主任研究員)

平成二十二年十月二十三日(土)  
十三時三十分〜十六時三十分、明治  
神宮社務所講堂、主催〓明治神宮国  
際神道文化研究所、共催〓明治神宮  
史研究会、科学研究費補助基金盤研  
究(C)「帝都東京における神社境  
内と「公共空間」に関する基礎的研  
究」

・映像の夕べ「生命(いのち)と文  
化の多様性―里・山の祭と芸能―」  
上映会(共催)、講演〓中村茂子(民  
俗芸能学会理事)、解説〓茂木栄  
主催〓國學院大學環境教育研究プロ  
ジェクト、(財)ポラ伝統文化振  
興財団、共催〓社叢学会

平成二十三年一月二十一日(金)  
十六時三十分〜十九時四十五分、洪  
谷キャンパス百二十周年記念二号館  
一階二二〇四教室

・共存学フォーラム二〇一一「生命  
(いのち)と文化の多様性―森・里・  
海の絆を結ぶ―」(主催)  
第一部「生物多様性条約会議(C  
OPI0)をふり返る」、報告〓高  
山進(CBD市民ネット・共同代  
表、三重大学教授)、各作業部会関  
係者報告〓森良(エス・コミュニ  
ケーションセンター代表)、「持続可

能な開発のための教育の10年」推進  
会議理事)、上村英明(市民外交セ  
ンター代表、恵泉女学園大学教授)、  
呉地正行(ラムサールネットワーク  
日本共同代表、日本雁を保護する会  
会長)、浜口真理子(CSOピリス  
シード主催者、コンセプト開発デザ  
イナー)、川廷昌弘(博報堂DYメ  
ディアパートナーズ、国際生物多様  
性年国内委員会地球生きもの委員会  
委員)、全体討論「COP10と将  
来への課題」(司会〓古沢広祐)。

第二部「文化多様性が紡ぎだす世  
界」、基調講演〓畠山重篤(NPO  
法人「森は海の恋人」代表、京都大  
学フィールド科学教育研究センター  
社会連携教授)、個別報告〓茂木栄  
、波沢寿一(樹木・環境ネットワー  
ク協会理事長)、李春子(科学研究費  
補助金「東アジアの「鎮守の杜」を  
めぐる「知」と「学」の編成」代表)、  
ヘイヴンズ・ノルマン、総合シンポ  
ジウム司会〓古沢広祐

共催〓(財)ポラ伝統文化振興財  
団、CBD市民ネット開発部会、社  
叢学会  
平成二十三年一月二十二日(土)十  
時〜十八時三十分、AMC棟一階常  
磐松ホール

出張

○学術資料館

・吉田恵二、内川隆志、加藤里美、  
深澤太郎、笹生衛、加瀬直弥、田島  
太良、江戸邦之、鈴木孝規、平野哲也、  
新原佑典、小西沙和、熊倉史子「出  
雲地域における祭祀遺跡に関する学  
術調査」、島根県飯石郡飯南町、平

成二十二年八月三十日(月)〜九月  
九日(木)

・加瀬直弥「神道資料館部門事業」、  
和歌山県伊都郡高野町、正智院、平  
成二十二年九月六日(月)〜九月九  
日(木)

・田中秀典「近代学術資産のデジタ  
ル化・データベース化による再生活  
用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地  
直一神社絵はがき資料を中心に―」、  
高知県高知市、平成二十二年九月  
十八日(土)〜九月二十日(月)

・笹生衛、加瀬直弥「神道資料館  
部門事業」、静岡県浜松市、平成  
二十二年十月九日(土)

・内川隆志・深澤太郎「ホームカミ  
ングデーに係る展示資料集荷」、高  
知県高知市、高知県立坂本龍馬記念  
館、平成二十二年十月二十九日(金)  
〜十月三十日(土)

・内川隆志・深澤太郎「ホームカミ  
ングデーに係る展示資料返却」、高  
知県高知市、高知県立坂本龍馬記念  
館、平成二十二年十一月八日(月)  
〜十一月九日(火)

調査」、平成二十二年七月二十日(火)  
〜八月八日(日)

・中山郁・坂井久能「群馬県護国神  
社所蔵文書資料調査」、平成二十二  
年八月十七日(火)〜十九日(木)

・菅浩二「アメリカ合衆国・全米宗  
教学会(AAR)での発表、研究者  
との交流(アトラクタ市)、長老派  
歴史資料館での資料調査(フィラデ  
ルフィア市)」、平成二十二年十月  
二十九日(金)〜十一月四日(木)

・千々和到・菅浩二「英国・オクス  
フォード大学ピットリバース博物  
館でのB・H・チェンバレンコレ  
クション調査」、平成二十二年十二  
月五日(日)〜十二日(日)

・康成文・冬月律「中国東北地区  
における経済格差・少数民族問題、  
宗教施設の復建状況などの調査」、  
中国長白山・ハルビン・長春他、  
平成二十二年九月十二日(日)〜  
二十六日(日)

・菅浩二・坂井久能「栃木県護国神  
社所蔵文書資料調査」、平成二十二  
年十二月二十六日(日)〜二十八  
日(火)

○研究開発推進センター

・高橋克秀・河原亘・冬月律「第七  
回日韓次世代フォーラム(これまで  
の一〇〇年、これからの一〇〇年)  
参加」、韓国・全南大学校他、平成  
二十二年六月二十五日(金)〜三十  
日(水)

・古沢広祐「国際社会学会・第十七  
回世界大会参加」、企画セッション  
「気候変動政策に関する国際比較共  
同研究」発表、スウェーデン イェー  
テボリ、平成二十二年七月九日(金)  
〜十九日(月)

・中野裕三「ドイツ・マールブルグ  
大学宗教資料館・同図書館での資料

## 資料紹介 石清水祭 供花神饌



京都府八幡市に鎮座する石清水八幡宮では、毎年九月十五日に石清水祭と呼ばれる重要な祭祀が執り行われる。石清水祭は、早朝の奉幣の儀をその核心とする。この祭儀は、男

山山上の社殿から山下の頓宮殿へと神幸した三座の祭神に対し、天皇から遣わされた勅使が幣帛を奉り、祭文を奉読する。奉幣の儀の始まりは、平安時代中期にまでさかのぼる古いものである。中世後半に中絶期があり、明治初期にも神幸の儀が途絶えたが、明治十六(一八八三)年に旧儀復興が決まり、翌年に日程の変更(もとは八月十五日に実施)を伴いつつも再興し、現在まで続いている。奉幣の儀において、頓宮殿の神前には神饌が奉られるが、その中でも最も特徴的なものが、頓宮殿南面の縁に奉られる供花神饌である。供花神饌は十二台用意され、その種類は、松・竹・牡丹・梅・橘・菊・桜・南天・杜若・椿・紅葉・水仙からなる。幅、



奥行き各約三六センチメートル、高さ約二一センチメートル木製の台の上には紙で花が作られ、その周囲に石や動物の造形がやはり紙でかたどられている。手間がかかったものであるが、この神饌はまづりに先立って毎年調達されるものである。

石清水祭は、幕末維新期以前は石清水放生会と呼称されていた。魚鳥を放つ放生は、仏教の殺生戒に基づく善行であるが、この放生と八幡神との関係は勸請元である豊前(今の大大分県)宇佐八幡宮からのものである。撰関期の行政便覧ともいえる『政事要略』巻二十三に引く旧記によると、宇佐八幡宮の放生会は、養老年間(七一七〜七二四)の隼人の乱において、神威で人を殺めたことを克服せんとする、八幡神の託宣が契機とされ、極めて重要な祭儀と位置づけられた。

これを石清水八幡宮でも受け継いだことは、仏教と八幡神との関わり深さを考えると必然ともいえるべきものと評価できるが、他方、石清水八幡宮は、貞観(八五九〜八七七)初年に、朝廷の守護のために宇佐宮から神霊を勧請することで創建されており、石清水放生会の神幸の儀は



この勧請に由来するものとも考えられている。すなわち、全体的な視点から石清水放生会を見ると、神幸と奉幣からなる神事が、祭祀の重要な軸として成り立っているものといえるのである。実際、朝廷において放生会は神事として受け止められ、行われ続けてきた。放生儀礼そのものは宮側の主宰で行われ、現在の石清水八幡宮においても、生きとし生けるものの平安と幸福を願う重要な行事として行われている。

石清水放生会における供花神饌献儀の事実は、中世の詳細な式次第が載録されている『神葉集』から知ることが出来る。そこからは、奉幣、祭文奏上に先だって、舞楽の奏される中、御殿に「造花十二瓶」が奉られることになっていったことが分かる。造花の供花は東大寺お水取りや、薬師寺の花会式(いずれも修二会)など、仏教法会においても奉られるものである。その点からすると、石清水祭の供花神饌も、仏教の影響を受けたものであることが推測できるが、季節の移り変わりと密接な神道祭祀の意義を考えると、重要な奉献物であることは間違いない。

なお、本学学術資料館所蔵の十二台の神饌は、石清水八幡宮の御厚意により、平成二十二(二〇一〇)年に寄贈を受けたものである。

(加瀬直弥)

写真 伝統文化リサーチセンター資料館に展示中の供花神饌(上)、梅(中)、杜若(下)